

「我が人生思い残すことなし」(後編)

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 空襲、原爆、敗戦、屈辱の時間が50年流れ、昭男は北海道から孫を出迎え、関西空港に来た。その帰りの船上で目に映る大阪湾岸の工業地帯とその背後にある高層ビル群。あっという間の復興だが、なぜか心は晴れない。=

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

3. 震災

「それがや、今年神戸は大震災でまたえらい壊れてしもた。人もぎょうさん死んだ。」昭男が吐き出す様に言った。雄大はぎょっとして聞いた。そうだった、今年1月阪神地方を大震災が襲ったニュースは知っていた。でも遠い北海道では、それはひと事であり、そんな実感は湧かなかった。もちろん学校では話題になったが、先生が人助けの大切さを説いただけで、生徒の間ではどうっていう事はなかった。その直後にお父さんがいなくなった事以外は。

そう、雄大の父大志^{ひろし}は「ちょっと実家に行って来る。心配やし。」と言って家を出たきり戻らなかった。もう半年以上も経つのに何の音沙汰もなかった。その後、間もなくして会社の借金の督促が母元に来る様になって、母は致し方なく新築してまだ3年の家売り、僕たちは母の実家近くのアパートに引っ越したのだった。バブル効果もあり、土地は値上がりしてたおかげで、それで何とかしのぐ事はできた。でも父は帰って来なかった。

ほどなくして船は、神戸港に着いた。でもそこは船上から見た大阪の街とは全く違い、あちこちで空地が目立ち、地面の土が露出して仮設のプレハブ住宅やら、工事中の建物やらで別世界の様だった。さあ、着いたで。ここからタクシー乗るか。バスやら地下鉄やらややこしいし。」昭男が促すと皆一台のタクシーに乗り込んだ。「須磨浦公園まで行ってくれるか？」昭男が運転手に告げた。メーターが倒され車が動き出した。途中長田のあたりに差し掛かると急に視界が開け、まだ建物の瓦礫と思われる山があちこちで見られた。「この辺りが一番酷かった。あんな光景は神戸の大空襲以来やった。家が燃え、人が生きたまま焼かれて死んだ。」昭男が搾り出す様に言った。「きつかったやろなあ。」美子がそれに続いた。『きつかったやろなあ。』



それは亡くなった人に対してでもあり、残った遺族に対してでもあった。雄大は精一杯想像してみた。『人が生きながら焼かれ死ぬ』あり得ない事だった。想像を絶していた。「しゃけどな、戦争はこんなもんやない。空襲にしても、原爆にしても、それはもっと悲惨やった。」「何せ数が違う。何千人どころか、何万人、何十万人やしな。」昭男は自ら言い聞かせる様だった。

「さあ着いたで、おじいちゃんらの家や、古いけどな。この辺りはまだ壊れんでなんとかなった。」「雄ちゃんたちは、昔お父さんいやはった部屋使ったらええ。クーラーもあるしな。」美子は孫たちに声を掛け、そっと背中を押すように招き入れた。「何でもいるもんあったらいいや。もうごはんやしな。今日はすき焼きやでえ。」美子の口調に2人は顔を合わせ微笑んだ。

(つづく)